

池田草庵先生に学ぶ会

「姪盛小齋記」を読む

令和七年二月『池田草庵先生著作集』 P240～241

四月五日学習分(担当・池田、北見、田村繁、高木)

姪盛小齋記(二)

予自_レ少年、亦非無志也、而因循偷惰、
日復一日、塵累日纏、染欲日重、且晝拈亡、夢寐顛迷、

読み

予少年自_レり、亦志無きにあらざるなり、而るに、
因循_{いんじゆん}偷惰_{とうだ}、日復一日、
塵累_{じんるい}日纏_{まとわ}り、染欲に日を重ね、
且晝拈_{たんちゆうこくぽう}亡、夢寐顛迷_{むびてんめい}す、

訳

私は少年の頃より、志がなかったわけではない。しかし、ぐずぐずとしてなまけることがあった。毎日毎日、世間の煩わしの中で過ごし、回りの欲に日重ね、昼間は心が乱れ、眠っていても、乱れ迷ってしまう。

言葉

因循_{いんじゆん} ぐずぐずしていて極性がない

偷惰_{とうだ} トウダ 〈偷惰〉 かりそめに安易をむさぼる

塵累_{じんるい} ジンルイ 俗世間のわずらわしさ

染欲_{せんよく} 欲に染まる(?)

且晝_{じつ} (晝) 〓 タンチュウ 昼間。 日中。

拈_{ねん} コウ みだす かき乱す 拈亡_{ねんむ} コクボウ 乱れ失う

夢寐_{むび} ムビ 眠って夢を見る

顛迷_{てんめい} テン 正気を失っている

視_み 今日之所_こ爲_る、與_よ未_ま嘗_か讀_よ書_の之人_{ひと}何_{なん}異_い、
則_{すなは}其_{その}所謂_{しよゐん}志_し者_{もの}竟_{つひ}果_は何_{なん}事_{こと}、帳_{ちやう}然_{ぜん}回_へ首_{くび}、

読み

今日の為す所を視る、未だ嘗って書を読まざるの人と何ぞ異ならんや、
則ち其の謂う所の志は竟いに果たして何事か 帳然として首を回し、

言葉

與トと

竟キヨウ おえる ついに

帳然チヨウゼン 心が安らかで落ち着いている様

回首 ふり返って見る

訳

今日の自分のしているところを見る。今まで書物を読んだことのない人と何ら異なるか、則ち、謂う所の志とはたして何ごとか。心静かに自分をふり返ってみる。てみる。

豈堪慙憤、然而今日予尚彊、而未及衰老也、

自是改圖、發憤激勵、毀譽不_レ管、

読み

豈に慙憤に堪えんや、然かり而こうして、今日予尚お彊し、而して未だ衰老に及ばずなり、是より圖を改め、發憤激勵、毀譽に管せず

言葉

慙憤ザンブン 恥じていかること

彊キヨウ ツヨイ 強い はげむ つとめる

衰老スイロウ 歳をとて体力が衰える

毀譽キヨ そしることとほめること

訳

どうしてこの恥じ入ることや憤に堪えられようか。しかし、大丈夫だ。今、私は励む。まだ、衰えた老人にはなっていない。これより、思いややることを改め、發憤して勤め励む。世の中に、けなされたり、ほめられたりするこ
とには係わらず、

饑困不_レ恤、身命放捨、打併歸一、
如_二闇夜之求_一燭、則猶可_レ望_二於將來_一也、

読み

饑困_{きこん}恤_うれえず、身命放捨、打ち併べて一に歸す、闇夜の燭を求むるが如くせば、
則ち猶將來に望むべきなり、

言葉

饑_二キ_一 飢え 困_二コン_一 苦しむ
恤_二アワレム_一 あわれム うれエル
放捨_二ホウシヤ_一 うち捨てること
打_二動詞の上について……する意を表す_一
併_二ならぶ_一 あわせる
帰_一 一つにまとまる

訳

飢え困窮することを恐れず、身を捨てて、一つの事に集中し、闇夜に灯りを求め
めるように、将来にきつと希望が持てるだろう。